

自然災害は人間の罪に起因する。西欧のキリスト教神学はこれまでずっとそう考えてきた。啓蒙主義者たちは、リスボン大震災を契機に、そのような考え方に疑問を投げかけた。筆者は、自然災害を「悪の問題」、あるいは「神の義の問題」ととらえることをやめ、「被造物の管理権」という視点からとらえ直すようにと提唱する。本資料は、2012年秋の大野キリスト教会の教育セミナーの講演原稿を修正加筆したものである(2013年11月)。

\*\*\*\*\*

## 自然災害をどう受け止めればよいのか

### 「リスボン大震災」に関する啓蒙主義者たちの論争を出発点に考える

#### ごあいさつ

羹尚中氏が、最近のベストセラー『続・悩む力』において、日本の宗教界は被災地支援のボランティア活動を熱心に行っているが、この震災の意味に対する本質的な問いかけには沈黙を守っていると苦言を呈しています。確かに、東日本大震災後日本のキリスト教界においても、たくさんの講演会・シンポジウム・研修会などが開かれました。しかし、「自然災害をどのように考えたらよいのか」という核心に迫るような話は聞こえてきませんでした。

そこで今回の教育セミナーでは、この問題を真正面から取り上げたいと思います。

#### 1. 自然災害からチャレンジを受けているキリスト者

日本は世界でも珍しい地震多発国です。戦後50年間は、大きな地震に見舞われることなく、いわゆる地震安定期を過ごしてきました。しかし、1995年の阪神大震災の頃から、日本列島の地震帯は、世界規模での連動を背景に、活発に活動するようになりました。最近では、新潟県中越沖地震(2007年)、東日本大震災(2011年)、長野県北部地震(2011年)と続いています。近い将来、関東から九州の太平洋沿岸地域に南海トラフを中心とした複合的な巨大地震が起こることや、首都圏に直下型の大地震が襲うことが予測されています。神奈川県は富士山の噴火という問題も抱えています。

地震だけではありません。日本では、毎年いくつもの台風を経験します。異常気象や水害、ハリケーンや落雷、そして山火事や土砂災害など、自然災害と言われるものはたくさんあります。むろん災害は、このような自然を原因とする事柄だけではありません。交通事故や思いがけない事故、さまざまな事件に巻き込まれること、病気、家族内の不幸な出来事など、悩みや心配は尽きません。天災と人災を区別できないことも、たくさんあります。いずれにしても、私たちはこれらの災害に備えなければなりません。

むろん、人災であれば、人間に責任があり、それに対応しなければなりません。ところが、自然災害になると、手の打ちようがありません。そのようなとき、多くのキリスト者は「神は愛であるのに、どうしてこのような災害を起こされるのか」という疑いを抱きます。「神は全知全能で、すべてを支配している」と信仰告白しているのですから、このような疑問をもつことは当然です。不信仰だと批判する人もいるでしょうが、神の愛を信じればこそ、悩まざるを得ないのです。いわゆる「認知的不協和」が起こっているわけで、これは信仰者特有の問題です。

キリスト者は誰でも、このような問いかけに答える責任を負っています。しかし実際には、難しいのも事実です。かのローマ法王でさえ、このように問いかけられた少女に「私にも分からない」と答えねばなりませんでした。ほとんどのキリスト者は、せいぜい「神のみ心は分からない。神は最善をしてくださる。だから、すべてを全能の神のみ手に委ねましょう」と言えるぐらいで、お茶を濁さざるを得ないでしょう。

ここで、私の個人的な体験を話すことを許していただきたいと思います。2004年12月26日、スマトラ沖地震が起きました。そのとき私はシンガポールの日本語教会で奉仕をしていました。シンガポール自体はその地震による被害をほとんど受けませんでした。しかし、インドネシア、タイ、ミャンマー、インド、スリランカなどの近隣諸国は、甚大な被害に見舞われ、死者数は20万人に及びました。これらの国々はいずれも、宗教が大きな影響力をもつ国家です。その後しばらくの間、ユダヤ教、イスラム教、プロテスタント、カトリックなどさまざまな教職者が集い、「その時(地震の時)神は何をしておられたのか」というテーマでたくさんのシンポジウムが開かれました。当時の私

は、このようなタイトルにひかれ、時間の許す限りあちらこちらの集いに出かけました。

しかし残念ながら、どこに参加しても満足できる答えは得られませんでした。それぞれの宗教家たちの主張点が浮き彫りにされ、面白いとは思いましたが、失望しながら帰宅の途につくのが常でした。福音派キリスト教のプレゼンテーションは、「神のみ旨は分からない。しかし、何が起こっても、神が主権者であることを信じる。イエスは苦しむ者、悩む者と共に歩まれた。だからキリスト者もまた、被災者に寄り添うことが求められている」というようなものがほとんどでした。「そのとき神は何をしておられたのか」というテーマからすると、何か詐欺に遭ったような感じをぬぐえませんでした。

以来、「地震や津波のような自然災害をどのように受けとめたらよいのか」という問題は、私にとって重要なテーマになりました。

## 2. 東日本大震災に対するキリスト教界の対応

東日本大震災が起こり、1年が経過しました。この間、キリスト者の間では、教会や神学校、各支援団体のセミナーなどにおいて、たくさんのシンポジウム、講演会、座談会などが開かれました。また書物も出版されました。そのほとんどは、「物質的な支援をどのようにしたらよいのか」、「被災者たちの心のケアにどのように向き合ったらよいのか」という具体的・実際的な方法論に関わるものでした。むろん中には、震災の本質に迫ろうとする講演(説教)もなかったわけではありません。ここでは、その一つ一つを詳しく取り上げることはできませんが、これまで語られてきた内容を大雑把に六つに分け、私の個人的感想を交えて紹介させていただきます。

まず、「神はこの震災を通しキリスト者に根本的な変革を迫っている」と語っている発言者が多いのに驚きます。「神からの変革の迫り」という言葉が、キーワードのように使われています。しかし、起こってしまった東日本大震災についてはともかく、今後巨大地震が日本列島近郊に起こることが予測されることに危機意識をもっている発言者は意外に少ないように思います。ほとんどの発言者は、聖書や神学、教会の世界に留まり、従来の思考の枠から出ていません。「神からの迫り」の実態が何なのかがはっきりせず、そういう気分が戸惑っているというような印象を受けます。

二番目に、東日本大震災を「終末の裁き」と結びつけている発言者もいます。この場合、終末の裁きを「この世の終わり」と見なす悲観的な見方と、「新しい世界の始まり」と見なす希望的な見方とに分けられます。どちらの立場に立つにしても、津波にすべてを流されつくしてしまった惨状を前にすれば、終末的衝撃に襲われることは自然なことだと思います。ましてこの度は、放射能による見えない恐怖が加わっているのですから。

しかし、震災を「終末の裁き」に性急に結びつけ、悲観的になったり、恐怖感や厭世的気分には陥るのはいくつかの理由で、聖書は確かに、終わりの時代には世界の各地で地震が起こることを警告しています。私も、キリストの再臨は近いと感じています。しかしイエスは、人々のいろいろな噂には惑わされないようにと警告されました(マタイ 24:3-14)。東日本大震災のような自然災害は、それほど頻繁ではないにしても、今後も世界各地に起こります。従って、ある一つの災害とキリストの再臨とを直接結びつけるなら、ちょっと時間が経つと恥をかくことになりかねません。東日本大震災のような巨大地震であっても、悲しいことですが、数年もすれば、東北の片隅で起こった一つの出来事に風化していきます。終末に絡ませて語ってもよいような地震など、実はないのです。

三番目に、多くの発言者が、不条理な苦悩を経験したヨブに被災者たちとの類比的関係を見出しています。ヨブの喪失感に被災者の苦悩を重ね合わせたくなるのは、とてもよく分かります。しかし、ヨブに対する試練は、サタンがヨブの信仰に疑いをもち、神に訴え出たことに起因した、極めて特殊なものでした(ヨブ記 1-2章)。東日本大震災の被災者が受けている苦しみは、通常的な自然災害によるもので、異質な出来事です。いくばくかの類似点を取り上げ、安易に聖書から語ることに、気をつける方がよいでしょう。

もしヨブ記を被災者との関連で用いるのであれば、ヨブと友人たちが延々と繰り返す「因果応報思想に基づく神義論」を取り上げるのがよいでしょう。被災地には、因果応報や罰の思いで苦しんでいる人々が大勢います。彼らのそんな思い煩いが無意味であることを示すには、ヨブと友人の問答は役立ちます。イエスは盲人に、「盲目に生まれついたのは、この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません」(ヨハネ 9:3)と語りかけました。この言葉ほど、被災者たちに安堵感を与える言葉はありません。またヨブは、友人たちとの論議や長老からのアドバイスには満足できなかったのですが、ただ被造物の内に隠されている神ご自身のみ力を示され、宇宙の主権者の前にひれ伏しました。このようなヨブの神体験は、被災者に対するすばらしいメッセージになります。

四番目は、多くの発言者が被災者のうめきを詩篇に見られるさまざまな苦悩と関連づけています。説教という脈絡の中であれば、むしろそれは許容範囲内に属することでしょう。しかし、詩篇の作者たちは皆、基本的には神と契約を結んだ「神の民」です。そして彼らの苦悩は、それが(ダビデやソロモンのような)個人的なものであっても、(出エジプトやバビロン捕囚のような)共同体的なものであっても、神が契約を破棄し、民を見捨てられたのではないかと感じるどころから発したものです。ところが、東日本大震災の被災者たちの背景は異なります。個人的なレベルや何らかの共同体(地方や国家)に起因した罪などとは無関係です。あくまでも、自然のリズムの中で生じた災害です。この点を曖昧にして説教しますと、聴衆に大きな違和感を与えることになるでしょう。

五番目は、たくさんの発言者が、福音書に見られるイエスの姿を被災者に示したり、被災地の支援活動のモデルに見立てて説教しています。イエスが、この地上で飢えた人の空腹を満たし、病んでいる人を癒し、共同体から締め出された人々を迎え、さまざまな縛りの中にある人々を解放されたことは事実です。従って、このような「人に仕えるキリストの姿」を被災者に示すことは、被災者に大きな励ましを与えることでしょう。

しかし今我々は、全く次元の異なる問題を扱っていることを忘れてはいけません。受肉されたキリストは、死んでよみがえり、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」と宣言されました(マタイ 28:18)。そのような全世界の支配権をもつキリストが、どうしてこのような悲惨な震災を見過ごしているのか、そういう問いかけを私たちは突きつけられているのです。万物の創造者であり、歴史の支配者であるキリストについて尋ねられているのに、そのことを横に置き、「イエスは悲しむ者と共にいて、涙を流しておられる」などと話すのは、ごまかしにすぎません。問われている問題からは逃げ、聞かれていないことを答える、そういう不正直なキリスト者になってはいけません。

「イエスは被災者の傍らで最も悲しんでいる」とか、あるいは「この震災の中でもっとも痛みを感じているのは神である」などと、簡単に言うてはいけません。中には、イエスが「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ 27:46)という十字架上の叫びを、被災者たちの叫びになぞらえる説教者もいます。しかしこのイエスの叫びには、どんな人間にも理解できない贖いの奥義が隠されています。類比するときは、細心の注意を払わねばなりません。被災者たちの絶望的な状況を「墓に横たわる土曜日のキリスト」になぞらえる説教者もいます。これもおかしな話です。普段の礼拝では「よみがえられた日曜日のキリスト」を説きながら、震災の状況を説明する段になると、土曜日に戻ってしまう。これでは、「ガリラヤ湖で嵐に難儀している弟子たちを見た途端、イエスは眠り始めてしまった」と語るようなものです。聴衆は、聖書に書いてある通り、「イエスは眠りから覚め、風や海を叱られた」と説教することを期待しているのです(マルコ 4:35-41 参照)。

第六番目は、ある発言者は地震や津波は自然災害であり、超自然的な原因や意味を問うことは無駄だと主張しています。キリスト信仰から離れた一般の人々であれば、このような理解は当たり前のことです。普段「神も仏もない」と言っている人たちが、災害に直面した途端、「神よ、どうして」などと叫ぶのは自己矛盾です。むしろ、普段そう言っていたとしても、彼らに宗教心が全くないわけではないので、その気持ちを理解することは大切です。

しかし、キリスト者は普通の人々とは異なります。普段から、神を「全能の創造者、歴史の支配者」として礼拝しています。一羽の雀さえも神のみ許しがなければ地に落ちることはないし、神は私たちの髪の毛までも数えておられる、と信じています。そういう神を信じるからこそ、なぜあのような悲惨な震災が起こったのか、と問わざるを得ないわけです。ここにある矛盾をどうしてくれるのか、そういうキリスト者の叫びに、私たち牧師は答える責務を負っているのです。

以上が、日本の牧師あるいは神学者たちが東日本大震災について語った事柄です。皆さんは、どの発言に深い感銘を受けるでしょうか。あるいは違和感を覚えるでしょうか。もしあなたがキリスト者であるなら、祈りつつ、一つ一つの意見に対し、真剣に耳を傾けていただきたいと思います。東日本大震災をあらためて深く心にとめ、神のみに正直になって。

### 3. リスボン大震災とは何だったのか

自然災害をどう受け止めればよいのか、これが今日のテーマです。この問いに答えるために、18世紀の啓蒙思想家たちがリスボン大震災をめぐる展開した論争から始めたいと思います。地震や津波の問題が神学的に大き

くクローズアップされたのは、リスボンの大震災が初めてだからです。

1755年11月1日午前9時40分、ヨーロッパで最も有名な都市リスボンに大地震が襲い、津波と火災による甚大な被害をもたらしました。その日はカトリックにとって最も大切な祭日、「諸聖徒の日」でした。地震が起こったのは、信徒たちが礼拝をささげていた真最中でした。突然の大音響と共に激しい揺れが2度続き、その2、3分後に3回目と4回目の揺れがたて続けに起こりました。わずか20分ほどの間に、リスボンの街のほとんどが崩壊しました。市内にあった41教会のうち30以上の教会が全壊となりました。建物の崩壊は火災を誘発し、強い風も手伝ってリスボン市内のほとんどの地域が火の海と化しました。街の中心部には5メートル幅の地割れができ、移動も困難を極めました。

地震からおおよそ90分後、11時近くになって、15メートルもの巨大な津波が数分間隔で押し寄せました。4波、5波と続く津波が、港や市街地を襲いました。津波は川をさかのぼり、川周辺の建造物を一瞬にしてさらってゆきました。津波はただの高い波というようなものではなく、ありとあらゆる瓦礫を巻き込んだ10メートル以上の高さの凶器となって、港や広場に避難していた市民を瞬間に飲み込んでいったのです。かろうじて津波から逃れた人々も、市街地に燃え盛る火事に巻き込まれ、逃げ場を失い、命を落としました。この炎は何と5日間も燃え続け、街のほとんどを焼き尽くしたのです。当時のリスボンの人口は27万5千人でしたが、そのうち6万人の人々が地震及び津波によって命を奪われました(死者数は2万人から9万人までの諸説あり)。

キリスト者は、リスボンでの出来事を通し、たくさんのことを学ぶことができます。

例えば、この大震災は、地中海一帯のどこまでどのように及んだか。各国の歴史にどのような影響を与えたか。リスボンの街の復興計画は、誰によって、どのような青写真が描かれ、どのようなタイムスケジュールで実行されたのか。費用はどのように捻出されたのか。その際にどんな反対にぶつかり、それをどう乗り越えたのか。リスボンの政治的指導者だったポンバル侯は市の復旧・復興作業にどのようなリーダーシップを発揮したのか。次第に独裁的にならざるを得なかった危機的状況におけるリーダーシップの在り方をどう評価したらよいか。

どれ一つとっても興味深いものばかりです。そしてそれは、今の日本の国家や政治にとって大きなヒントになることでしょう。もしキリスト者が神の国の民としてこの世界の管理を委ねられているとすれば、このような問題の一つ一つに目をとめることは当然のことです。歴史から学ばない者は、歴史をつくることもできません。同じ失敗を繰り返すことになるからです。

しかし、この講演の目的は、啓蒙主義者たちが「リスボン大震災」をめぐるどのような神学論争を展開したのか、という点にあります。とても残念ですが、そこに焦点を当て、リスボン大震災に関する他の問題はすべて、棚上げにすることにします。お許しいただきたいと思います。

#### 4. 啓蒙主義者たちのリスボン大震災をめぐるの論争

リスボン大震災をきっかけに、啓蒙思想家たちの間に大きな論争が生まれました。この論争はキリスト教神学にとってはとても重要なものでした。自然災害に関し、キリスト者が考えねばならない問題について、たくさんヒントを提供しているからです。

この論争の火付け役になったのは、フランスの哲学者ヴォルテールでした。彼は震災直後に「リスボンの災害に対する詩篇」を書き、友人たちに送りました。その一節を紹介しましょう。彼は地震の災害を見てこう叫びます。

「これでも諸君は、自由にして善なる神の永遠の掟の結果だ、というのか。

神の復讐はなれり、というのか。

母の乳房の上で血にまみれる嬰兒が何の罪を犯したであろう。

リスボンは快樂にふけるロンドンやパリよりも多くの悪徳をもった、というのか。

リスボンは潰滅し、パリでは踊っているのだ。」

結局、ヴォルテールが言いたかったことをまとめると、次のようなこととなります。

地震が罪深き人々を罰したのであれば納得する。だが実際には、何の罪もない人々を悲惨のどん底に追い込んでいる。このことは到底許すことはできない。人間はなぜ、自然の不条理な暴力にこれほどまでに翻弄さ

れなければならないのか。人間の生活は、自然の力の前では「悲しい偶然の戯れ」にすぎないのか。哲学者の楽観論はもはや何の役にも立たない。地上にこのような悪が存在する限り、楽観主義を放棄しなければならない。このような惨状の世界は、決して「美しい予定調和の世界」ではないし、「すべては善なり」という世界でもない。

ここでヴォルテールが批判している哲学者とは、楽観主義者の哲学者ライプニッツや詩人ポープでした。では、そのライプニッツは、どのように考えていたのでしょうか。彼は、神学の宝庫と言われる分厚い「弁神論」という書物の中で、自分の考えを明らかにしています。そこには、アウグスティヌス以来の伝統的な悪の理解が乗り越えられ、新しい考えが提唱されています。簡単に要約すると、次のようなものになります。

「悪」には、形而上学的な悪、物理的な悪、道徳的な悪の三種類がある。第一の「形而上学的な悪」とは、「完全性の欠如」を指す。被造物はすべて不完全なもので、完全性を欠如している。もし被造物が完全なものであるとすれば、それは神になってしまう。第二の「物理的な悪」とは、自然現象や人間の肉体の苦痛に見られるような悪をいう。神は人の幸福を願っているが、それが神の唯一の目的なのではない。部分の要求のために全体の秩序と美を犠牲にするわけにはいかない。被造物世界は、全体的協和が完全に実現することにあるのであって、部分が最終目標なのではない。第三の「道徳的な悪」とは、神に由来するものではなく、人間に与えられた自由の結果生じたものである。人間の自由は善用されれば聖化の手段となり、悪用されれば滅びの道に向かってしまう。確かに、この世界には、悲しみをもたらす「戦争」、「飢餓」、「災害」など、さまざまな悪が存在する。しかしそのことをもって、神にこのような世界を創造した責任を問うのは正しくない。たとえ個別的にさまざまな悪に見えるものが存在するにしても、全体として見れば、世界は調和している。最終的には悪は善に飲み込まれ、信仰と理性は調和される。

ライプニッツの論理展開は、未だ中世の香りを放っているようなところもありますが、自然災害の問題を考えるには示唆に富んだものです。ヴォルテールが批判したのは、まさにこのライプニッツの最善観・楽観主義でした。

ヴォルテールは、自分の詩を多くの友人に送りました。その送られてきた詩に答えたのが、かの教育者として有名なジャン・ジャック・ルソーでした。ルソーは、リスボン地震の被害が大きくなったのは、人々が都市の密集した地域や高層住宅に住んでいたことにもあった。もし人々が分散して住んでいたなら、火災などの被害ははるかに少なくすんだはずである。またある人々は、多くの持ち物に執着して、すぐに避難しなかった。このような人間の我欲が被害を拡大してしまった、と述べています。ルソーは、自然災害の被害を最小限に食い止めるためには、人間がどのようなことに注意したらよいかを真剣に論じていたのです。今日の日本社会が自然災害に対して取り組んでいる「防災・減災・防犯」という問題意識は、既にルソーの中にあっただけです。

もし日本のキリスト教界が、ルソーのこのような考えを真剣に学び、神学的にきちんと整理しておいたなら、キリスト教神学は政府のこの種の政策にも積極的な関わりをもち、日本社会に大きな影響を与えることができたでしょう。しかし、伝統的なキリスト教神学には、このような問題意識の入る余地はありませんでした。

ヴォルテールは、ルソーの返信には応答しませんでした。その代わりに、その後小説「カンディード」を著わし、自分の主張を展開しました。こうして彼は、当時の一般民衆に自分の問題意識を投げかけたのです。その小説は飛ぶように売れ、一般民衆に啓蒙主義思想を広めました。

一方、このリスボン大震災を経験して、独自の思索を深めた啓蒙思想家がいました。かの有名な哲学者イマヌエル・カントです。彼は、リスボン地震直後に、地震に関する三つの論文を立て続けに発表しました。カントは、地表に現れた地震現象の一つ一つを詳細に検討しました。その結果、地下に一続きの空洞があり、そこに地震の原因があったと考えました。そして、どの場所のどんな方向が危険なのか、街を建設してはいけない場所はどこなのか、そのような問題にまで踏み込み、検証作業を繰り返しました。さらに自然界の生き物が人間より早く地震を察知していた事実を指摘し、ある種の動物は人間よりはるかに勝る地震予知能力を持っていると論じました。

カントはまた、もし木材ではなく別の材料で家を建てていけば、火災による被害を相当減らすことができただろうと推定しています。ルソーと同じように、自然災害に対する人間の責任という問題を考えていたのです。自然科学を研究する人々の間では、カントのこの種の研究は非常に高く評価されています。それゆえカントは、今日「地震学の父」とまで言われています。

## 4. 啓蒙思想家たちの論争を無視したキリスト教界

ところが、キリスト教界は、当時の一般的な知的風潮とは違った対応をしました。カトリックあるいはプロテスタントを問わず、啓蒙主義者たちの論争に誠実に向き合うことはしませんでした。その典型的な姿は、ジョン・ウェスレーに見られます。彼は、リスボン大震災直後に、「最近のリスボン大震災に対する真剣な考察」という文書を公刊しました。神はすべてのものの支配者であり、自然的・偶然的な原因によるものは何一つない。たとえこのような災害であっても神に起因する。従ってそれは、神の裁きであり、警告である、と述べたのです。

当時のプロテスタントの説教者たちは皆、ウェスレー同様、リスボン大震災をカトリックに対する神の裁きと見なしました。その頃のリスボンはカトリックの大主教の座があり、異端尋問所でも有名な街でした。世界中のカトリック教会を物心ともに援助し、海外の植民地にカトリック信仰を布教する根拠地でした。文字通り、ローマに次ぐカトリック第二の都市でした。しかも、地震のあった11月1日はカトリックの最も大切な祭日「諸聖人の日」でした。地震が起こったのはミサの真最中、9時40分でした。多くの聖堂は完全に破壊され、跡形もなくなっていました。プロテスタントの人々にとっては、これこそ「カトリックに対する神の裁き」と映ったのも、無理からぬことでした。

当時の啓蒙思想家たちの中には、神への敬虔な思いに逆らうような言動があったことは事実です。しかし、すべての啓蒙思想家がそうであったわけではありません。彼らの多くは、キリスト教信仰を人間の歩みにとって真に意味あるものとしたという問題意識をもち、葛藤していたのです。啓蒙主義者すべてをひとくくりにして、「不信仰な合理主義者」というレッテルを張ってしまうことは間違いです。それでは、キリスト者の信仰とキリスト教神学を貧しいものにしてしまうだけです。

当時のキリスト教界は、彼らの論議に加わる余裕をもっていませんでした。教会は、自分たちの信仰に疑問をもたせないよう、ガードに回ったのです。つまり、啓蒙主義者たちの考えは教会に対する挑戦である。疑問をもつこと自体が不信仰、危険、異端的、高慢なことと見なしたのです。啓蒙主義＝不信仰というレッテルを張り、自分たちにとって不都合な問題提起は、すべて無視するという道を選び取ったのです。啓蒙主義者がうっかり何かを言おうものなら、直ちに異端尋問所送りと眼を光らせたのです。

キリスト教界のこのような姿勢は、啓蒙主義が繁栄した18世紀末から19世紀に限った時代だけではありませんでした。19世紀から21世紀の初め、つまり今日まで、ずっと続いてきました。つまり、今日のキリスト教神学は、啓蒙主義時代をバイパスして構築されたものなのです。啓蒙主義時代に問われた論争課題を無視したことにより、現代のキリスト教はこの世と社会から乖離するという結果を招いたのです。

カトリックは、伝統的な自然法理解を守ることに固執しました。プロテスタントの一部は合理主義の影響を受け、自由主義神学へと向かいました。しかしその多くは教派形成に向かい、教派神学の構築に熱心になりました。20世紀初頭にはバルトとブルンナーの「自然神学論争」が起こり、プロテスタント主流派と言われるグループは、自然神学の否定という方向に舵を切ります。

一方プロテスタント福音派の流れは、ウェスレーのリバイバル運動、アドベンチストの再臨運動、根本主義者の聖書信仰運動、カルスマ派の聖霊運動など、様々な動きを見せますが、いずれの流れにおいても自然神学が取り上げられることはありませんでした。

## 5. 自然災害を「神の義」の問題と考える福音派

啓蒙主義者のはしりであったライブニッツは、自然災害は人間の罪の結果生じたとするアウグスティヌス以来の考えを乗り越えようしました。そこで、悪には三種類あり、自然災害はその二番目の「物理的な悪」に属すると主張しました。神は人の幸福を願っていても、それが唯一の目的ではない。部分のために全体の秩序と美を犠牲にすることはない。被造物世界においては全体が優先され、部分がそれに従わなければならないことがある。自然災害はその結果起こるものである、そう考えたのです。

ところが、残念ながら、このような自然災害に関する問題意識は、その後のキリスト教界にほとんど影響を与えませんでした。それは、今日にまで至っています。このことを明らかにするため、二人の神学者を紹介しておきましょう。

う。その一人は、福音派の中では「今が旬」と話題にされるニコラス・トーマス・ライト(N. T. Wright)です。彼は、『悪と神の義』という書物を著しました(2006年)。その書では、2004年のスマトラ沖地震に言及していますので、自然災害に深い関心をもっていることは言うまでもありません。では、彼の主張を追いかけてみましょう。

ライトはまず、スーザン・ニーマンが主張する、地震やハリケーンのような「自然がもたらす悪」とテロリストによる「人間がもたらす悪」とを区別することに賛成する(19-21頁)。そして、聖書の「悪」の取り扱い方は、教理的・倫理的な説明ではなく、「神がどのような方であるかをイスラエルの民の間で開示されていく過程の中で描かれている」と述べる。それは出来事の中に記述されており、抽象的に論理化されたり、体系化されるものではない(45-46頁)。そういう前提に立ってライトは、旧約聖書(47-74頁)及び新約聖書(75-100頁)、そして来たるべき新しい世において(101-130頁)、「悪」がどのように描かれているのかを解説する。最終的には、神は悪に決定的な勝利を治め、私たちをすべての悪から解放される(131-163頁)。ライトは、結論として次のように述べる。

私たちは、「このすばらしい、美しい、根本的に善であるこの世界になぜ悪が存在するのか」を説明できない。しかし、いつの日か、すべてがよくなり、神の勝利が現われ、真理を知る時が来るだろう。その時を待ち望みながら、今の世においては、キリストの死と復活の土台の上に立って、聖霊の働きを受けながら生きていく。今あるところで、隣人を愛し、敵を赦すという経験をすればするほど、「すべてが善に変えられていく」という神学的な深い真理を味わうことができる。(164-165頁)

N.T.ライトは、現代的な問題意識にふれ、西欧の伝統的な「二元論的悪の理解」を克服しようと考えました。特に「悪」を、教理的にではなく、歴史的に記述しようとした点には、斬新なものを感じます。しかし、たとえ「悪」を歴史的に解説したとしても、その背景にあるライトの考え方は、結局伝統的な「悪の理解」と大差ありません。リスボン大震災のときの啓蒙思想家たちの論争にも言及しながら(19-21頁)、自然災害をホロコーストや9.11の出来事からは区別していません。彼ほどの鋭い神学的な感性の持ち主であっても、西欧の神学的伝統の枠から飛び出すことは難しいのでしょう。

同じことは、ローザンヌ世界宣教会議の神学委員長クリストファ・ライトについても言えます。彼は、今年の6月、日本宣教会全国研究会において「東日本大震災に対する神学的応答－聖書と悪の問題」という主題講演をされました。タイトルから明らかなように、彼もまた、西欧のキリスト教の伝統に基づき、自然災害を「悪の問題」として論じています。その結果、自然災害は「不可解」であり、説明することは「時に害になる」とまで言いきります。結論として彼は、次のように述べています(同講演の原稿12頁)。

それでは、日本で起きた地震・津波のような破壊的な悪に対して、私たちはどんな神学的・宣教的な応答ができるのでしょうか？ これまで述べた点を踏まえて、次のようなことが言えます。

神は私たちに悪の根源を啓示していないので、こうした出来事については私たちに金輪際理解できない不可解さが存在することを受け入れなければなりません。ですから、「説明」を考え出そうとすることは避けるべきです。説明は時に益になるより、害をなしてしまいます。

私たちは泣く人と共に泣くべきです。こうした出来事に対して哀しみ悲嘆に暮れ、抗議することは、正当で聖書はこれを許可し、肯定するばかりか、そうする際に私たちが用いるための表現を豊富に提供しています。神は私たちと痛みを共にし、私たちの叫びを聞いておられます。ヨブの友人たちが、一週間だけにせよしたことを、私たちもするべきかもしれません。つまり、苦しむ人と共にじっと座り、彼らの苦しみを共にするということです。

西欧のキリスト教神学は、自然災害を伝統的に「悪の問題(あるいは神の義)」として扱ってきました。つまり、神の義を守るために、自然災害は人間の罪に起因すると言わざるを得なくなります。それは結局、神の裁きに行き着きます。そこまで言い切れない神学者たちは、「不可解」という言葉を使ってお茶を濁さざるを得ないわけです。このような神学では、はっきり申し上げて、これから厳しい自然災害に直面することを余儀なくされている日本の教会とキリスト者にとっては、何の役にも立ちません。

## 6. 神は自然法則をどのようにご覧になっているのか

自然災害は「悪の問題」ではなく、「自然法則」あるいは「自然のリズム」がもたらすものです。従ってそれは、人間の「被造物管理権」に属します。もしそのように理解するならば、日本の教会とキリスト者は、自然災害を迎え撃つ準備をしなければなりません。そうしない限り、管理責任の放棄ということになります。

むろん、このような考えを提唱するのであれば、私は重要な問題に答える責任があります。それは、自然災害が起こるとき、神はどのように自然法則に関わっているのかという問題です。言うまでもなく、それに答えることは簡単ではありません。聖書にはっきり示されているわけではありませんので、自然神学(自然と神との関係を理性に基づいて論じる学問)の世界に踏み込むことになります。では、その問題について簡潔に説明しておきましょう。

普通、神は主権者(統治者)であると言いますと、神は何でも意のままにこの被造世界を動かしている、というイメージになるでしょう。神＝専制君主的な独裁者です。しかし実際には、神はそのように統治をしているわけではありません。神はこの世界を創造されたとき、すべての被造物にそれぞれにふさわしい法則性を備えられました。神はむろんのこと、その被造物自身も、あるいは人間のような第三者の被造物であっても、その法則性を侵害することは許されません。ただし、法則性というものには自由度は全くない、と考えられがちです。しかし、そうではありません。人間のように極めて高い自由度をもつ法則性によって生かされている被造物もあれば、動物のように限られた自由度をもつもの、鉱物のようにほとんど自由度のないものもあります。神は、さまざまな自由度を含んだ、それぞれの法則性に基づき、被造物を統治されています。

神は、むろん全能の神です。法則性に介入できないお方ではありません。ただ、介入なさらないということです。なぜなら神は、その法則性の自律性を最大限に尊重され、「自然法則には特別な事情がない限り侵害しない」と、ご自身の意志をもって定められたからです。人間の例で言えば、神は人間に自由意志を与え、その自由意志を最大限尊重されました。それは、神に従うことはむろん、反逆することさえできる自由でした。もしそうでなければ、それは自由とは言えません。自由がないところには、責任も生じません。神は全人類の益を願っていますが、それと同時に、いつでも人間の自由意志を保障されています。

同じように神は、自然的な被造物の法則性に対しても、自律性と自由性を尊ばれ、それに仕える形で統治されます。しかも神は、被造物が相互間で一定の法則に基づいて影響し合う存在として、万物を造られました。それぞれの法則性にいろいろな自由度があると同時に、それぞれの法則性が複雑に絡み合っ一つの自然現象を生み出します。その組み合わせの部分において、神が介入される余地はたくさんあるはずですが、何らかの理由で神がその必要性を認めれば、神はその法則性を超えた超自然的な働きかけを行われます。ここに、キリスト者の祈りの余地が生じてきます。

人間は、神との共働管理の責任を託されました。従って、それぞれの被造物の法則性を学び、それに基づいて神と共に被造物を管理せねばなりません。神は、人間が喜んでこの重責を果たせるよう、細かな心配りをしておられます。それは、両親が子どもに気を配り、子どもの自主性を尊重しつつ、一人前に育て上げていくのに似ています。それゆえキリスト者は、子が親を信頼するように、神の摂理の御手に信頼しながら責任を果たすのです。

もし神が法則性を尊重し、いかなる場合にもそれを侵害しないというのであれば、神に祈ることは無駄になります。でもそれは違います。キリスト者は、この託された責任を全うするため、神の御心を伺い、神の助けを仰ぎます。そのような中で、神に状況を変えていただきたいと願わざるを得なくなることがしばしば起こります。そこに、キリスト者の祈りが生まれます。そうです。祈りの醍醐味は、神と被造物を共同管理しているときに起こるものなのです。

神がその祈りに答えられるかどうかは、むろん神の主権の中にあります。キリスト者は、神の介入を期待し、自分の願いを大胆に祈るよう勧められています(マタイ 7:5-11、ピリピ 4:6-7)。いつでも奇跡が起こるとは限りません。祈りの答えがどのようなものであっても、キリスト者は、神が共同管理の最終責任者として、「万事を益としてくださることを」(ローマ 8:28)信じて歩むのです。キリスト者は常に、「圧倒的な勝利者」になるのです(ローマ 8:37)。

## 結論

以上で、「自然災害をどう受け止めればよいのか」という講演を終わらせていただきます。このテーマに対する答は、「自然災害は、神が人間に被造物を共同管理しようと招かれたことの中で生じたものである」ということでした。それは、神から託された管理の仕事の中で一番厳しいものだと思います。

日本は、世界一の災害大国です。神は、日本人を信頼してこのような災害を与えられている、などと言うつもりは全くありません。ただ、日本という国に生まれた者たちは、その難題に対する管理使命が任されていることを受け止めねばなりません。人は皆、それぞれ自分に与えられた使命があります。それは、神がその人を信頼されているから委ねられたものです。神は自分を、自分にとって一番ふさわしい場所に置いてくださったと信じましょう。そして、神のそのような期待に応える生涯を送りたいと、祈りをささげましょう。